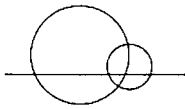


〈感想〉



## 福岡資料展示会・講演会を振り返って

東亜同文書院大学記念センター  
ポストドクター **武井義和**

東亜同文書院大学記念センターが2006年に文科省によりオープン・リサーチ・センター事業に選定されて以降、毎年1回各地で記念センター所蔵資料の展示会と講演会を開催していますが、2008年は11月23日～25日の日程で、福岡市のアクロス福岡を会場に行なわれました。

スタッフは前日の22日に福岡入りし、初日は会場オープンまでの2時間で展示会場の準備を終えるという慌しさでした。また、初日の午後には「アンパンマン」の作者で有名なやなせたかし氏と、藤田佳久記念センター長を講師とする講演会も開催され、多くの聴衆で会場はほぼ満場となりました。

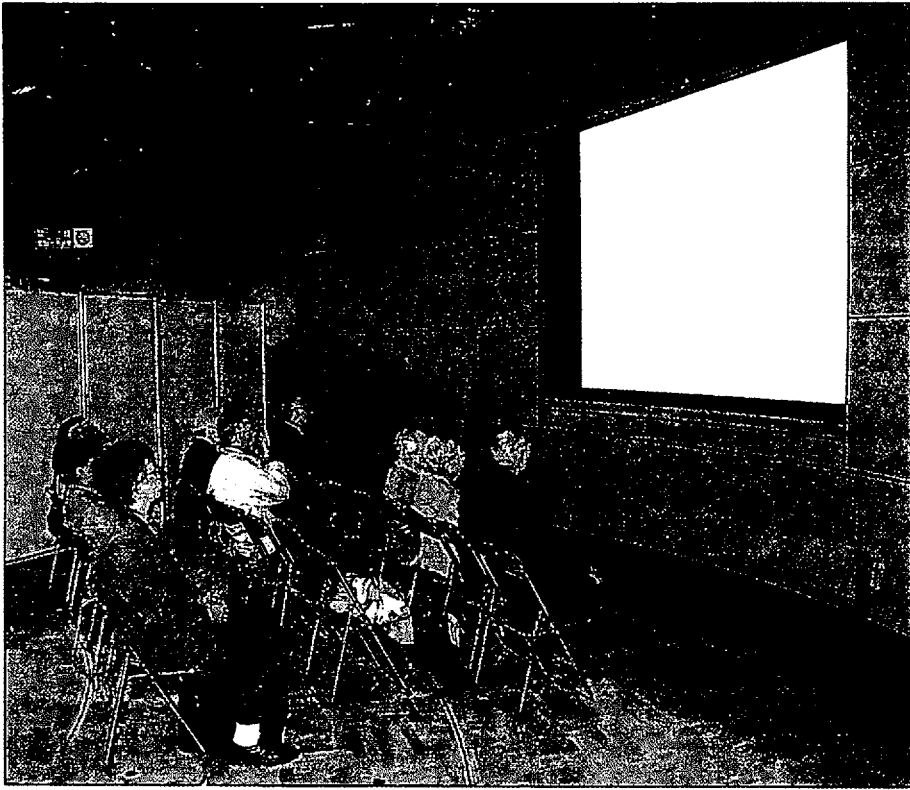
福岡県は東亜同文書院生を多く輩出した県の1つであり、また、書院第5代院長・大内暢三は福岡県八女郡出身です。東亜同文書院と深い関わりがあるこうした土地柄を反映してか、3日間を通じて多くの方が来場し、展示資料はもちろん、会場で上映されたDVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み」を熱心に見ていました。中には、戦時中書院で学び大内院長に間近に接したという卒業生もおられ、書院に関するさまざまな展示物に感慨深げでした。

展示会場では2日目と3日目に、武井が1日3

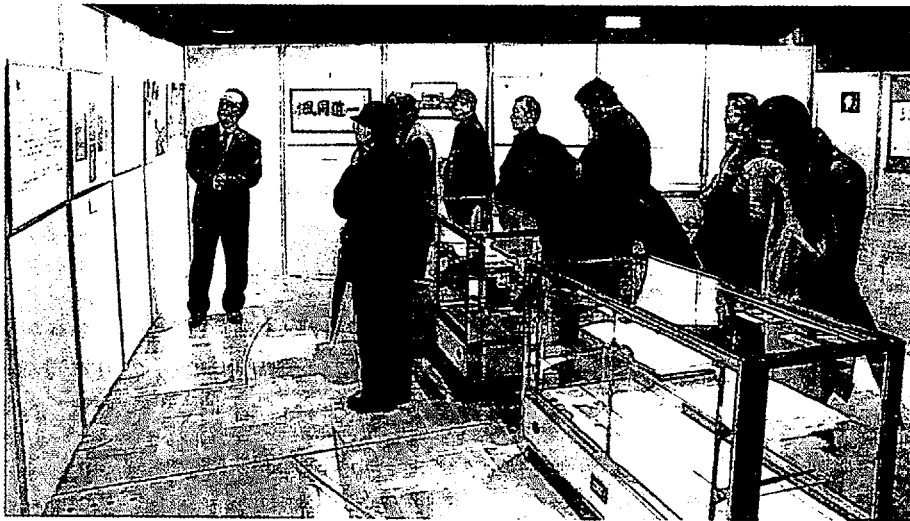
回の展示資料説明会を担当しました。特に、本学図書館の成瀬さよ子氏の尽力により、大内院長の生家（白城の里）が所蔵する資料の中から記念センターが作製させて頂いた、院長ゆかりの写真や書などのレプリカ5点も特別展として出展しましたが、そうした資料を指しつつ、貴族院議長で書院の経営母体だった東亜同文会初代会長も務めた近衛篤磨の秘書を若い頃に務めていたこと、後に東亜同文書院院長に就任したことを説明すると、大きくうなずいた人が多かったのが印象的でした。

会期中の24日午後、大内院長の遠縁に当たる手嶋明子氏により、大内院長が揮毫した書や掛け軸、さらに雑誌『支那』20冊が記念センター宛に寄贈されました。その時の様子が西日本新聞社の記者に取材され、翌日の『西日本新聞』に掲載されました。記念センターとしましては寄贈頂いた資料を大事に保管するとともに、これからの展示や研究に役立てていきたいと思っております。

総じて、福岡県の多くの方に東亜同文書院について関心を持って頂くとともに、東亜同文書院から愛知大学への繋がりについても知って頂いた資料展示会・講演会であったと思います。



DVD「東亜同文書院から愛知大学の歩み」を見る人々



展示資料説明会に参加した人々